この子は露川 瑞穂(つゆかわ みずほ)。俺の可愛い彼女だ。
こうして学園ライフを満喫している。
「なぁ、今日も瑞穂の家、寄っていってもいいかな？」
「うん。いいよ」
学校帰りに彼女の家に寄っていく事情といえば、
大抵エッチなことと相場が決まっている。
「テストとか近いからな。
瑞穂に勉強とか教えてもらわないとな」
彼女は成績も良くて、スポーツもそこそこ出来る。
その上この容姿だ。当然男子にはモテモテである。
「祐ちゃん、本当は違う勉強したいくせに」
「…ばれた？」
「バレバレだよ。でも今日は親…居ないから」
性格も良くて、俺には勿体ないくらいだ。
しかし、彼女にはちょっと違うところがある。

それは数ヶ月前の事ー
彼女とは同じクラスの同級生だった。
彼女に一目惚れした俺は、
屋上に彼女を誘い、思い切ってアタックする事にした。
「どうしたの？高橋くん。
こんな所に呼び出して」
「実は俺、露川さんのこと、好きなんだ」

「えっ？」
「…ありがとう。
気持ちは嬉しいけど、ごめんなさい」
「そ、そう」
あっさり振られてしまった。
彼女とは最近仲が良かったから、いけると思ったんだが。
「もしかして、他に好きな人が居るのか？」

「う、ううん。私も本当は、高橋君が好き…」
「えっ？」
意味の分からない告白に、一瞬沈黙が流れる。
「だったらどうして？俺のこと好きなら、両思いじゃん」
「私、実はみんなに隠してる事があるの。きっと高橋君もそれを知ったら、私のこと嫌いになっちゃうから」
「き、嫌いに何かならないよ。俺、露川さんにどんな秘密があっても、俺の気持ちは変わらないくらい好きだから」
「…ううん、そんなの絶対無理だよ」
「どうして？」

「…私、実は男なんだ」
「…へっ？」
一瞬、目が点になる。今、男って言ったか…？
「…どう？やっぱり私のこと嫌いになったでしょ？」
「なんだ、そんなことか」
「えっ？」
「俺は露川さんのこと、別に男だからって嫌いになったりはしないよ」
「な、何言ってるの？高橋くん。
私、あなたと同じ男なんだよ？お…おちんちん、ついてるんだよ？」
「あぁ、分かってるよ」

「分かってるのにどうして？
もしかして、高橋君は男の子が好きなの？」
「い、いや。そういう訳じゃないよ」
「それじゃあなんで？」
「だって、露川さん綺麗だし、性格も可愛いし。
俺はそれを好きになった。
だから別に、中身なんて関係ないじゃん」
「高橋君……（カッコいい…ますます好きになっちゃういそう…）」

ーそんなこんなで、彼女と付き合う事になった。
まぁあの時はカッコよく決めたつもりだったが、動揺したのは確かだ。
まさか彼女が男だったなんて予想も付かなかったし。
しかし俺は彼女が男だと言われても、振り切ることはなかった。
それは俺が初めて本気で恋をした相手だったからかもしれない。
だから、俺の出たあのセリフは、結局本心だったのだろう。